
今日からrock

べびら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日からrock

【Nコード】

N1513S

【作者名】

べびら

【あらすじ】

中学2年生の夏。

rockに目覚めた少年のお話。

※fc2でも掲載中です。

今日からロック（前書き）

中学2年生の夏。

俺はrockに目覚めた。

”rockに目覚めた”という表現はおかしいのかも知れない。

元々洋楽かぶれのおばさんの影響もあるのかも知れないが、中学2年生の夏、友達に半ば強制的に見せられたロックバンドのDVDを見て素直にカッコイイと思った。

NIRVANA・・・、SEX PISTOLS・・・、The Beatles・・・。

あまりにも有名どころばかりのバンドだが、その時の自分には「これこそがROCK!」とともに影響をうけてしまった。

今思えば痛々しい話なのかも知れないが、それ以来完璧にrockにハマった俺はすぐにギターを買い、友達とバンドを組んで、本気で”音楽で食っていこう!”と思った。

でもその痛々しい頃の俺のおかげで今の自分があって、周りの仲間がいて・・・。

痛々しかったころの自分と、CDを貸してくれたアイツには感謝の気持ちでいっぱいだ。

そんな昔話を、俺はふと思い出す。

今日からロック

――中学2年生の夏。

昨日から夏休みに入った俺は、学校がしばらく休みなうれしさと、いつもは学校に行っている時間帯に家でのんびりとしてる虚無感のようなものに襲われ、部屋でぐったりと横たわっていた。

クーラーの前で横たわりながら漫画を読み、氷いっぱいのお茶を飲んで・・・。

夏休み最高！と心の中で叫んでみる。

”ピンポン”

ふと家のチャイムが鳴る。

玄関をあけるとそこには、同じ中学で一番仲の良い友だちの”佐々木秋人”と”更科かつみ”がいる。

「ふったん、ちーっす！」

2人が放つ第一声のシンクロっぷりに、「2人で同じタイミングで言おうな！」とくだらない計画性があったんだろうと推測する。

この2人が言うふったんというのは俺のあだ名。

小学生の頃からのよしみの”更科かつみ”と、自分の名前”藤原かつみ”は苗字こそは違うものの名前が同じだ。

更科の頭文字”さ”を取って”さったん”、藤原の頭文字”ふ”を取って”ふったん”、小学生ならではのあだ名センスだ。

小学生の頃から、”さったん””ふったん”で通っていると、自然と中学でもあだ名は変わらない。

「うす、とりあえず入れよ。あとそういうくだらない事は反応しづらいからやめろ。」

少し冷たく2人に返事を返すが、仲良しならではの冷たさでもある。

「まあとりあえず、今日2人を呼んだのは他でもない。重大な発表があるからだ。」

部屋の戸を閉めたのとほぼ同時に秋人が話しだす。

「いや・・・、ここ俺の家だから。つかそういうのは座ってから話そうぜ？ タイミングがおかしいっていうか・・・。」

「いやいや、まあまあ。そういういなさんな。」

「・・・で？ 何？ 発表って？」

特に聞きたくもないが、律儀に聞いてやる。

「バンドやろうぜ！！」

得意げに言う秋人はニヤニヤとした顔振りで俺とさったんを見ている。

「いや・・・、俺は別にいいけど・・・。かつこよさそうだし。ふったんは？」

「あーバンドってアレだろ？ ギターとか？ 俺そんなんできねえし。」

「フフフ・・・。こんなこともあろうかとあまりノリ気ではないふったんとさったんに、このDVDを持ってきました！」

秋人がだしてきたDVDは、家に来た時から秋人がなにやら手に持っていて必死で隠そうとしているのが見えていたDVDであった。なので自分としては「あー、そういうDVDだったのか」が素直な感想。テレレツテレレーン！と得意げに某猫アニメのような効果音まで付けてだした割に俺とさったんの反応は薄い。

――最初から見えてたからだ。

そんな俺達の反応を気づいてなのか、気づいていないのかルンルン気分で秋人がDVDプレイヤーに、持ってきたDVDをいれて再生させる。

そのあまりのルンルン気分、鼻歌を歌いながら自然とケツが左右に動いている秋人の姿を見て確信する。

「いや、これは気づいてねえな・・・」

秋人に気づかれぬように小声で呟く。

DVDプレイヤーがガーっという音を立てて鳴り、中のDVDを読み込んでいるのが分かる。

DVDが再生されるとロックバンドのLIVE映像が流れる。

「・・・ニ？なんて読むんだこれ？」

英語なんかさっぱり俺が秋人に聞いてみる。

「N I R V A N A !」

「ニルバーナ？」

「いや、違う。N I R V A N A ! !」

「だからニルバーナだろ？」

「発音がちげえんだよ！N I R V A N A ! !」

秋人はただのジョークのつもりだろうが、イラっとした気持ちを抑えれず殴りかかろうとしたその時。TV画面いっぱいに移されたN I R V A N A が演奏しだす。

つい振りかぶったその手を止め、TVに目を向けるとギターやドラムやらがガチャガチャと音を立ててひとつの音楽をつくっていた。

素直に感動した。カッコよくて見とれてしまった。

N I R V A N A のライヴDVDが終わったあとも、我を忘れて他のDVDを早く早く秋人に要求している自分がいた。

全部のDVDを観終わった俺は、完全にロックバンドに影響されていた。

今日からギター

秋人にrockバンドのDVDを見せられてから三日後、俺は秋人とさったんと3人で楽器専門店へ足を運んだ。

アレ以来俺の頭の中は音楽・・・いやロックバンドの事で頭がイッパイになっていた。

「なー、秋人。ギターっていうろんな形があるけどなんか違うの？」

「はあ・・・。ギター買いに行きたいって言い出したのふったんなんだから、予習ぐらいはしとけよなー。」

少し上からの言葉遣いにムツとくるが、今日はギターの参考を聞くのが優先。こんなところでモメてもいられないので大人しく秋人の説明を聞く。

「ギターっていうっても一括りにはできなくて、アコギだとかガッツトギターだとかエレキギターとかがあるんだ。お前はどうせエレキがほしいんだろ？」

「当たり前！ ロックといったらエレキだろ！」

「そうとも言えないけどな？ N I R V A N A だってエレキじゃなくアコギを弾いて出した曲だって山ほどあるぞ。まあ、でも普通ならロックバンド〃エレキって考え方でもおかしくはないけどな。」

心のなかで「あー、そうですかい。最初のくだりいらなくね？」と思ったが口に出す寸前で止めておく。

「まあ・・・、仕方ないから教えてやると、これがレスポールで――――長いので省略――――」

秋人の自慢げな知識披露も入っていて、実に分かりにくい説明だったが、要約するところだ。

エレキギターには、“ソリッド” “セミアコ” “フルアコ” に分けられる。

基本ロックバンドは”ソリッド”のギターを使うのが多いので、ソリッドギターを選んで間違いはないらしい。

更に難解な事に”ソリッド”の中でもまだまだ枝分かれしているらしい。

ストラトギターはたくさんさんのジャンルに適応していて、初心者が使うのにはオススメらしい。

さらにテレキャスやら、ムスタングやら、モズライトやら・・・。

「ああああああ、もうなにがなんやら!!」

秋人のなにがなんだか分からない説明を聞いている内に怒りが限界点にまで達する。

「じゃあもう、これでいい!」

「いや、ふったんそれベース!! しかも20万以上するって、それ。」

あたふたとしながら俺の怒りを抑えようとして必死な秋人。

「ふったん、ふったん。レスポール・・・? だかつてギターがロックの代名詞とも言われるくらいのギターらしいよ? それにしたら?」

そういえば、楽器屋に入ってからふらりと何処かへ消えたさったんが急に横から入ってきた。

「そうそう。少し重いギターではあるけどヘビーな音をだすから、いろんなロックミュージシャンが愛用してるくらいだから。レスポールにしな? なっ?」

横で入ってきたさったんに同意しながら俺の怒りを必死で収めようとしている秋人を見て、自分が暴れすぎていた事に気づき少しづつ冷静さを取り戻す。

「じゃあ・・・それにする・・・。」

急に冷静になるとさっきまでの自分が恥ずかしくなり、顔が自然と熱くなっていくのを実感する。

「つーか、さったんも楽器とか知らないだろ? なんで分かんのか・・・」

・？」

冷静さを取り戻してやっとな思考回路に辿り着く。

「いや、店員の人に色々聞いてみた。ロックをやりたいならレスポールがオススメだってさ。初心者ならこちら辺から選べばいいらしいよ。最初は分からなくて当然なんだから、ふったんが良いギター見つけるまで俺たちは何時間でも付き合うよ？ね？」

さったんの優しい笑みに思わず涙が溢れそうになる。

このさったんの発言から4時間はただだろうか？

疲れる二人を尻目に、何時間もギターと睨めっこした俺は「これ！やっぱこの黒いのがカッコイイ！」

粘って粘ってやっとな決めたギターがジョン・サイクス仕様の”E LP-92CD-JS”というギター。

中学生のお年玉やらお小遣いやらで、貯めに貯めた貯金を全て消し去ってまで買った。

――この時の俺はこのギターさえあれば ”最強” だと感じていた。

ケースにしまったギターを打ち抱え、スキップ気味で歩く俺とは対照的に、後ろの2人はぐったりとしながら亀にも負けるような速度で歩きながら帰った。

今日から練習（前書き）

今日から練習

ギターを買ってから数日が過ぎた。

毎日夜遅くまでギターの練習をして、まだガチガチだがやっと弾けるようになった曲、NIRVANAの”Smells Like Teen Spirit”は、秋人に「簡単な曲だから当たり前だ」と鼻で笑われた。

それが悔しくてか毎日家にこもりギターをシャカシャカと鳴らす日が続いた。

今日もいつものように朝からギターを鳴らしていると、小さな雑音が聞こえてくる。

アンプから出るギターの大きい音が被さり、あやうく聞き逃すところだったが、この聞き覚えのある曲はレッド・ウオーリアーズの『CASSIN DRIVE』だ。

秋人の着うたとして設定している曲・・・、急いで携帯を掴み電話にでる。

「あ、もしもし？なんだ電話に出るの遅いから寝てるんだと思ったわ。」

そう思ったなら切れよ！とは言わずに

「ああ、悪い悪い。今ギターの練習してて気付かなかったわ。俺ギター下手だから」弾けて当たり前の簡単な曲もできない”から必死で練習しないと、と思っさ。”

あえてこの前の恨みを強調して返事を返す。

「おお！それはいい心がけだな！頑張ってんじゃん！！」

こうも素直に言い返されると返す言葉もなく、お前には負けるよと言わんばかりのため息をほく。

「そうそう。電話した内容なんだけどさ、家に防音の部屋があるからそこで練習しないか？さったんがやりたいって言ってたドラムもあるし。」

まじですかー・・・？　どんだけ金持ちなんだよこいつ。防音の部屋って、しかもドラム？

「ちょ、待った！　防音の部屋って・・・、つかドラムって何？　お前ドラムやれたの？」

「あれ？　話してなかったっけ？　俺のバンド好きの影響って父さんからきてるから、家にギターとかドラムとか、一般的なバンドで使うような楽器なら大体置いてあるよ？」

そういえば秋人の家には一回も入った事がなかった。特に理由はないが強いていうならば、俺の家から歩いて20分くらいのところに秋人の家があるので、とてもではないがめんどろで一度も行ったことがない。それに俺が行かずとも秋人の方から”勝手に”家に来るからだ。

「そ・・・そうなんか。別にいいんだけどさ・・・。」

「そっか！　じゃあ決まりだな！　今から父さんと車で向かうから準備しといて！！」

プツッ　ピー　ピー

要件だけ終わるとさっそく電話を切るところあたりせっかちな性格がもろにでている。

それから数分後に「着いたよー」とだけのメールが入ってきた。どんな高級車で来るのだろう、といささか緊張気味の俺であったが案外普通の乗用車だったので少し安心した。

「はやく乗って乗って。これからさったんの家にも向うから。」

「分かったよ、そう急かさなくてもいいだろ・・・。あつ、始めまして。お願いします。」

車に乗り込むと一応の礼儀として運転席に座る秋人のお父さんに一礼する。

「おう！　秋人がいつも世話になってるな！！」

そこにはヤのつく方が座っていた。

いや、秋人いわく普通の公務員とは言ってはいたが、外見はあきらかにその筋の御方でしょね、ハイ。

ビッチリと綺麗に決めたオールバック。趣味の悪いガラシャツが目につく印象があり、色眼鏡？というやつなのだろうか薄黄色に染まるサングラスの奥からはトラのような目がこちらを見つめていた。

手や首にはキラキラと輝く貴金属・・・。

・・・これで公務員。世界は広いなあ。

その後、3人を乗せた車はさったんを乗せる。車の中に上がり込むさったんは、やはり先ほどの俺と同じように、礼儀として挨拶をすませる。

「おう！さったんか！秋人がいつもお世話になってるな！！」

さったんが目を丸くして固まっていた。

先ほどの自分を見ているかのようなデジャヴである。貴重な体験の前に俺の心は、こんなイカツイおっさんが”さったん”などと可愛い愛称を使う事に腹筋が崩壊しそうになるくらいの笑いをこらえていた。

そして4人を乗せた車の中では、秋人と、そのお父さんが一方的に話しかけ、俺とさったん2人はただただすくんでいた。

そのまま悪夢を乗せた車は佐々木宅へと向かう・・・。

ヤのつく御方のようなお父様が乗せた車は5分くらいで佐々木宅へと着いた。

しかし俺にとってその5分間は地獄のように長く苦しい道のりであった。

さったんも同じであろう。顔がやつれている。

佐々木家の玄関の前に立つとふと不安がよぎる。お父様がアレな

ら、もしかするとお母様も……。

『さったん!』心の中で叫び、さったんの方を振り向くと、やっと家に着いたという安堵の表情を浮かべている。

――マズイ……。まだ、ここまでの考えには至っていないようだ……。

――――どうする!? 傷者のお父様と、いわゆる極妻の2人がいる家に何時間も居座っていないといけないのか?!?!? 意図せずシリアスっぷりを心のなかで演出する。

――――くそっ、なんて挨拶をすればいいんだ!? 何度シュミレーションしても「ご苦労様です」しか出てこない!! お茶なんかだされたらどうしよう……。あっ、お茶は飲めばいいのか。

あまりの不安にまともな思考ができない。

あたふたとしているうちに玄関のドアが開く。

「おーい、秋人の友達連れてきたぞー。」

「え!? 本当に? ちょっと、ちょっと待って! 今いくから!!」奥から可愛い声が聞こえたあと、スタスタと出てきたのは、見たところ25歳前後であろいうアメカジ風の綺麗なお姉さんだった。

あら? 最初から極妻さんが出てくるとばかり想像していたので、お姉さんが出てくるとは思わなかった。お姉さんはどうやら普通的那样だ……。助かった……。

「どうも初めまして。秋人君の友達の”藤原かつみ”です。秋人君にお姉さんがいるとは知りませんでした。」

続いてさったんも「初めまして”更科かつみ”です」と挨拶を軽くすませ一礼する。

2人の挨拶が終わったのに、お姉さんからの返事はない。おかしいと思い、床を見ていた視線をお姉さんの方へと移す。

なにやら顔が赤らんでいた。

「あっ、あの……。いや……。お姉さんではなく秋人の母です・。
」

モジモジとしながら”アキトノハハ”さんが答える。

「バカだなー、何照れてんだよ。お世辞に決まってるだろ。」

「あっ、ああ！そうか。ごめんなさいね！！私変に自意識過剰な所があつて」

ワハハと笑いあうやの方と”アキトノハハ”さん。

本日2回目のポカールタイムに突入した。

防音室に入ると、やっと3人きりになり、「あれはびっくりしたよなー」「だよなー」などと、さったん二人で話し合う。

その間、秋人は頭にクエスチョンマークを浮かべているかのようなアホづらでこちらを見つめて黙ってきいていた。

「2人とも！！そんなことより！良いアンプもあるし、ドラムもあるし！なんか練習しようぜ！」

防音室に入るまでの出来事があまりにも印象が強すぎて気付かなかったが、防音室の装備はスタジオ並の完備が整っていた。

「スゲー……。あっ、そういう俺がギターだろ？で、さったんがドラムやりたくて……。秋人は？」

「俺？ベースだけど？」

当たり前だろ？と言わんばかりの秋人。

さっそくギターとベースを、エフェクターを通してアンプに繋ぐ。エフェクターというのは、ギターやベースの音を様々な効果を付けて鳴らしてくれる機械のことだ。これぐらいの事はここ数日で分かってきた。

「さて……。ドラムだけど……。さったんドラムは初めて？」
仕切りたがりの秋人がさったんに問い掛ける。秋人の仁王立ちがまさに偉そうである。

「いや、ドラムができる友達の家で少しは遊び程度でやったことはあるけど……。本格的なのはちょっと」

「まあ、最初はそこにある教本でも読みながら適当に叩いて慣れるところから始めようぜ！急がなくても時間はあるんだし。」

「分かった」

さったんが一言つぶやくとすぐに教本へと手を伸ばす。

小学校からの馴染みで知っているが、さったんは意外と努力家だ。

「なあ、秋人！”Theatre Brook”の”裏切りの夕焼け”やろうぜ！」

「おっ！出来るようになったのか！？すげーじゃん！」

ニヒヒと笑う俺の姿はどこかの海賊王を目指すゴム人間のような純粹さがあつたかも知れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1513s/>

今日からrock

2011年10月8日23時44分発行